2023年12月15日　読売新聞

読売新聞　しが県民情報

意見・情報提供などは編集室へ
電話　077・522・5602、5507
ファクス　077・522・5589
Eメール　o-siga@yomiuri.com

やすらぎ コンシェルジュ

地域のかかりつけ医をバックアップしようと、患者の症状に合わせて各診療科の専門医らが訪問診療を行う「在宅医療センター（仮）」を市立大津市民病院（大津市）が来年４月、院内に開設する。急性期病院が、各患者の症状に沿って専門性を伴う訪問診療を行うことは全国的に珍しいという。（土屋康代）

大津市民病院　「在宅医療センター（仮）」来春開設

専門医らが訪問診療へ

「体を自由に動かせない患者が来院すると、逆に医療従事者が訪問診療をすれば、患者の負担を軽減できるのではと考えていた」と同院の河内明宏理事長。さらに、24時間365日対応の訪問診療を行う開業医の友人が、休日に近くの総合病院の協力を得て運営するケースをヒントにし、「在宅医療センター（仮）」の設立を発案。「当院は患者に寄り添い、地元の診療所を支えるため訪問診療を行う『地域急性期病院』を目指したい」と河内理事長。

河内理事長

角野理事

構想は、かかりつけ医から「同センター」へ紹介状が送られ、訪問診療の依頼があると、患者の症状に適した院内の人員を調整。それに沿って専門医、看護師、理学療法士、管理栄養士らが患者宅を訪ね、治療、リハビリ、栄養指導などを行うという。活動範囲は、同院から車で約30分で行ける範囲を想定している。

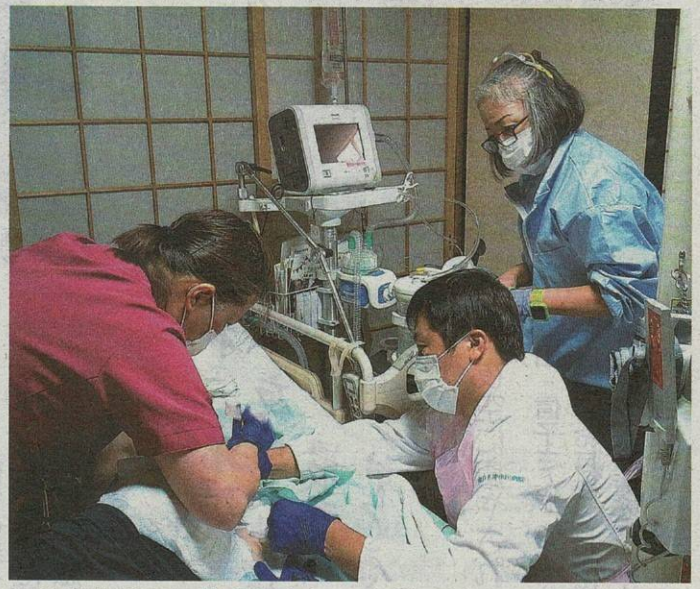
県健康医療福祉部の角野文彦理事は「通常、訪問診療は医師や看護師だけで患者宅へ出向くケースが多い。だが、今回は院内のスタッフ全員が関われて画期的だ」と話し、「かかりつけ医が、訪問診療で専門外の患者の症状に遭遇した際、急性期病院の専門医らが支えるシステムで全国的にも珍しい」と期待する。

◇

来年１月に「同センター」の開設準備室を設け、同４月の開設を目指しているが、現在、その前段階として、医師、外来と訪問看護ステーションの看護師のみによる訪問診療を開始している。寝たきりの状態や車いすの生活で、皮膚の血流が滞る褥瘡（じょくそう）で患者が苦しむケースが多い。

先月、持病があり寝たきりの70歳代の男性のかかりつけ医の紹介で、皮膚科の貫野賢（かんのさとし）診療部長、外来部看護師の桑野暢子さん、訪問看護ステーション看護師の橘郁子さんが男性宅で訪問診療を行った。男性は、でん部の褥瘡が悪化し皮膚が黒くなっていた。だが、かかりつけ医の専門は皮膚科以外で「皮膚が壊死（えし）したのではないか」と考え、同院の訪問診療を依頼。男性は１度の訪問診療で回復した。

訪問診療を行う貫野診療部長（中）、桑野さん（右）と橘さん



男性宅で治療を行った貫野診療部長は「患者の家の環境を目の当たりし、ベッドの接触具合や患者の姿勢など、褥瘡の原因がよりわかった。院内の外来での治療だけでは気づかなかった」と話す。桑野さんは「通常は外来で勤務。訪問診療では、同行した訪問看護ステーションの看護師による患者の症状の予測をして行うケアを学んだ」と言う。

貫野診療部長は「皮膚科医が患者宅へ伺うことはまれだ。だが、高齢化が進み需要は増加すると思われ、この取り組みが他地域でも広がればと思う」と語り、桑野さんは「病院の垣根を越え、地域の開業医を支えたい」と意気込む。